

# 生育体験の次世代育成力への影響

## —性差と保育実習体験の効果—

### Some Effects on the Readiness for Parenthood Through Experiences Gained in Giving Childcare

#### —Focusing on Gender Differences and Experiences in Childcare Learning Activities—

中野 由美子  
(Nakano Yumiko)

#### Abstract :

This paper examined the effects of experiences in childcare on readiness for parenthood in junior high school students, focusing on sex difference and effects of short childcare learning activities at nursery or kindergarten.

The questionnaire was answered by 119 boys, 107 girls of 13 year old. The main results were as follows: 1. Student's negative image to infant has declined through short (3hours) participating in childcare learning activities. 2. Boys were different from girls in effect of childcare learning activities. I suggested that it is necessary to develop the programs and methods for boys concerning experiences childcare activities and to train readiness for fatherhood.

**キーワード** : 生育体験、次世代育成力、性差、保育実習体験

**Key Word** : experiences in past childcare, readiness for parenthood, sex difference, experiences in childcare learning activities

#### 研究目的

次世代育成に関して男女共同参画が求められている今日、仕事領域に比して子育て領域への男女参画はなお進んでいない現状がある。家庭の教育力の低下や親役割の欠如が社会問題化している昨今、親教育や親の学習機会の整備が求められている。しかし、子どもの成長に応じた親役割が適切に発揮されるためには、生育過程での乳幼児との接触体験の量や質、自己自身の生育歴への自己評価など、過去の生育体験の影響が大きいと思われる。

原田(2006)は、1980年と2004年の大量調査の結果を比較し、若い母親の乳幼児との接触

体験や育児スキル体験が大幅に減少しているために、育児のイメージと現実のギャップが拡大し、乳幼児への無理解や具体的な対処法の混乱から育児に自信がもてず、育児不安や負担感・ストレスの増加につながることを明らかにした。

こうした観点から本稿では、大都市近郊の中学2年生男女を対象に、生育体験が次世代育成力に与える影響、および中学校の保育実習体験の次世代育成効果について性差を中心に検討する。対象を中学生にした意図は、学校における保育実習体験が最も多い時期であること、生育体験や性格・行動などへの客観的な自己評価が可能になる年齢であると予想されるからであ

る。

中学生男女の生育経験や保育実習体験の効果の相違を検討することは、親子備軍である次世代の母親準備性、父親準備性の形成過程を知り、とくに男子の子育て参加促進要因を探ることにつながると思われる。

## 研究方法

調査対象者・時期：大都市近郊都市の公立中学校2年生、男子119人、女子107人、合計226人、2002年9月～11月に実施した調査の再分析。

調査方法：保育実習の前と後の授業中に無記名の集団調査を教師に実施を依頼し、記入後封印し、教師に回収を依頼した。

調査内容：

- ①属性（性別・きょうだい数・家族構成・幼児期の母親の就労・就園状況・子ども希望）
- ②乳幼児との接触体験（世話体験・ふれあい体験・観察体験等）に関する24項目を4件法で回答
- ③幼児に対するイメージ（母親中心育児観に関する2項目を含む）18項目を4件法で回答（保育実習前・後に同一項目を調査）
- ④幼児期満足度（幼児期の自分の育ちについての自己評価）14項目を4件法で回答
- ⑤現在の自分の行動・対人関係に関する自己評価14項目を4件法で回答
- ⑥保育実習体験内容（実習場所・時間・回数・実習内容に関する4項目を実習後に回答）

## 結果Ⅰ 生育体験の性差

結果Ⅰでは、中学生の生育体験に関する調査項目の性差に関して検討する。

### （1）属性の性差

- i) きょうだい数：性差はない。

人数	1人	2人	3人	4人	(%)
男子	11(9.2)	51(42.9)	50(42.0)	7(5.9)	
女子	9(8.4)	62(57.9)	28(26.2)	8(7.5)	
計	20(8.8)	113(50.0)	78(34.5)	15(6.6)	

- ii) 家族形態：性差はない。

核家族	拡大家族	単親家族	その他	(%)
142(63.7)	44(19.7)	19(8.5)	18(8.1)	

- iii) 母親の就労：小学校入学ころの母親就労の有無、就労あり80人（35.7%）、就労なし144人（64.3%）で、性差はない。

- iv) 就園状況：幼稚園103人（46.3%）保育所116人（52.3%）その他3人（1.4%）で、性差はない。

- v) 子ども希望

子ども希望	男子	女子	計	(%)
子どもほしい	68(57.1)	81(76.6)	149(66.4)	
ほしくない	3(2.5)	6(5.6)	9(4.0)	
分からない	48(40.3)	19(17.8)	67(29.6)	

将来、子どもがほしいかを尋ねたところ性差があり、男子は分からないが多く、女子は男子よりも子ども願望が強かった（ $\chi^2(2) = 13.98$   $p < .001$ ）。

### （2）幼児期への満足についての自己評価

幼児期の生活満足度に関して、親子・夫婦関係、父母との接触度や団欒体験、家庭の雰囲気、偏愛などについて回想してもらい、14項目を2件法（あり、なし）で評定させ、ありを1点、なしを0点として合計得点を算出した。高得点ほど幼児期満足度が高い。幼児期満足度合成得点は2～14点 男女全体平均値は9.50（SD2.43）、男子平均値は8.98（2.41）、女子平均値は9.86（2.49）となり、女子が男子よりも有意に高い。（ $t(224) = 2.72$ ,  $p < .01$ ）女子は男子よりも幼児期の生活に満足している生徒が多い。以下4項目でも有意な性差があった。（表1）

### （3）接触体験の性差

男女ともに、世話体験＜観察体験＜遊びを中心としたふれあい体験と経験頻度が増えるが、個人差、性差が極めて大きい。とくに男子では世話体験、観察体験が極端に低い。

接触体験に関する24項目中、天井効果・フロア効果の項目を除き因子分析し、さらに共通性の低い項目、複数因子に負荷量が高い項目を除いた項目を再度因子分析（主因子法、Varimax

表1 幼児期満足度の性差 (男女別平均・SD・および t 検定結果)

	男子		女子		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
幼児期満足度合成得点	8.98	.241	9.86	2.49	2.72 **
「父が好きだった」	.61	.54	.79	.41	2.79 **
「母が好きだった」	.72	.45	.92	.28	3.95 ***
「よく抱かれた記憶がある」	.44	.50	.76	.43	5.25 ***
「家族で小さい頃の話をする」	.44	.50	.58	.50	2.23 *

\*\*\*p&lt;.001    \*\*p&lt;.01    \*p&lt;.05

表2 接触体験の因子分析結果 (主因子法・Varimax回転)

項目	I	II	III	共通性
I 因子 世話体験 5項目 $\alpha = .89$				
着替えをさせたこと	.786	.321	.244	.780
一緒に寝たこと	.732	.200	.304	.668
うがいさせたこと	.720	.240	.270	.649
絵本を読んでやったこと	.615	.361	.266	.580
じゃれ合って遊んだこと	.568	.364	.319	.556
II 因子 ふれあい体験 3項目 $\alpha = .88$				
幼い子どもを抱いたこと	.363	.755	.277	.778
子どもの体に触ったこと	.285	.826	.313	.862
笑いかけたら笑ってくれたこと	.332	.546	.394	.563
III 因子 観察体験 3項目 $\alpha = .86$				
裸の子どもを見たこと	.286	.312	.795	.810
オムツ交換を見たこと	.331	.414	.676	.738
授乳するのを見たこと	.414	.225	.583	.562
2乗和	3.058	2.332	2.156	7.546
寄与率	27.801	21.202	19.601	68.603

回転) し、負荷量0.5以上の11項目、3因子を抽出した。(表2)

第1因子は、基本的な生活習慣形成や子どもの世話に関する5項目であるので「世話体験」、第2因子は、身体接触を通じた幼児とのふれあいに関する3項目であるので「ふれあい体験」、第3因子は乳児の世話を見た体験の3項目であるので「観察体験」とした。各下位尺度の信頼度係数 $\alpha$ は .89, .88, .86である。

接触体験の因子分析において、各因子に高い

負荷量を示した項目の平均値を算出し下位尺度得点とした。3つの下位尺度得点についての性差を検討するためにt検定を行った。(図1)

その結果、「世話体験」尺度では、男子平均値1.67 (SD.74) と女子平均値2.44 (.99) 間で0.1%水準の有意差があった。(t (218) = 5.83, p<.001)

「ふれあい体験」尺度でも、男子平均値2.43 (.98) と女子平均値3.15 (.92) 間で0.1%水準の有意差があった。(t (220) = 5.61, p<.001)

「観察体験」尺度でも、男子平均値1.89 (.92)と女子平均値2.64 (1.05)間で0.1%水準の有意差がみられた。 $(t(222) = 5.72, p < .001)$

女子は男子よりも接触体験の下位尺度すべてで高得点であり、生育過程での乳幼児との接触体験の性差は非常に大きいといえる。

#### (4) 幼児イメージの性差

幼児イメージに関する18項目について、天井効果・フロア効果の項目を除き因子分析、さらに共通性の低い項目、複数因子に負荷量が高

い項目を除いて再度因子分析（主因子法、Promax回転）し、最終的に負荷量が.50以上の9項目、3因子を選択した。（表3）

第1因子は、幼児との関りを忌避する3項目であるので「否定的イメージ」、第2因子は幼児との関りを楽しむ3項目であるので「好意的イメージ」、第3因子は幼児の能力への信頼を示す3項目であるので「幼児能力信頼」とした。各下位尺度の $\alpha$ 係数は.82, .72, .61である。

幼児イメージの因子分析において、各因子に

図1 接触体験3尺度得点の性差

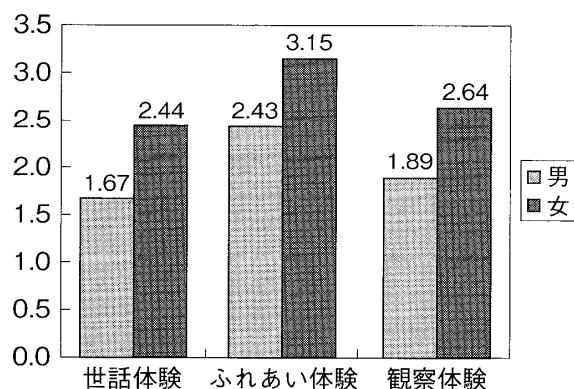


図2 幼児イメージ3尺度得点の性差

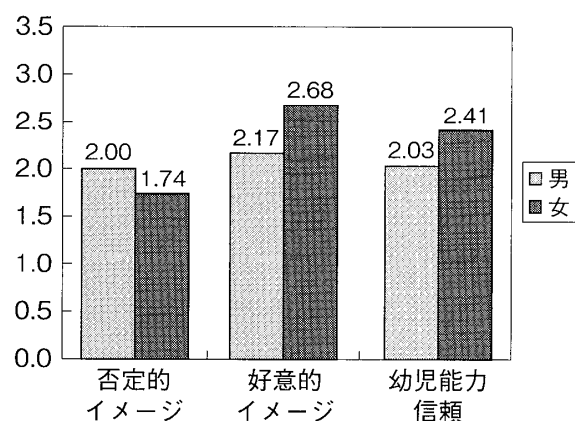


表3 幼児イメージの因子分析結果（主因子法・Promax回転）

項目	I	II	III
I 因子 否定的イメージ 3項目 $\alpha = .82$			
幼児といるとイライラすることが多い	.875	-.351	-.072
何回もせがまされると腹がたつ	.849	-.305	-.073
幼児と同レベルで遊ぶのはいやだ	.838	-.330	-.160
II 因子 好意的イメージ 3項目 $\alpha = .72$			
幼児に関心がある	-.321	.859	.233
幼児といると楽しい	-.581	.821	.313
私は幼児になつかれる	-.117	.685	.468
III 因子 幼児能力信頼 3項目 $\alpha = .61$			
幼児には理解する力がある	-.162	.355	.802
幼児はいうことを聴いてくれる	-.071	.184	.735
幼児は自分で生きていく力がある	-.060	.420	.688
因子相関			
I			
II	-.393		
III	-.110	.402	

高い負荷量を示した項目の平均値を算出して得た下位尺度得点を性差についてt検定を行った。(図2)

その結果は、「否定的イメージ」尺度では、男子平均値2.00 (SD.78) と女子平均値1.74 (.72) 間で5%水準の有意差がみられた。(t(222) = 2.59, p<.05)

「好意的イメージ」尺度では、男子平均値2.17 (.73) と女子平均値2.68 (.75) 間で0.1%水準の有意差があった。(t(220) = 4.76, p<.001)

「幼児能力信頼」尺度では、男子平均値2.03 (.63) と女子平均値2.41 (.69) 間で0.1%水準の有意差があった。(t(220) = 5.08, p<.001)

女子は「好意的イメージ」「幼児能力信頼」で高得点であり、「否定的イメージ」が低く、幼児への親近感がある。男子は「子どもは面白い」が中央値を超えるのみで概して幼児への関心が低く、幼児への「否定的イメージ」で女子よりも有意に高い得点を示した。

#### (5) 行動や対人関係の自己評価についての性差

現在の自己自身の行動や対人関係について中学生に自己評価を尋ねた14項目について、天井効果・フロア効果の項目を除いて因子分析、

共通性の低い項目を除き再度因子分析(主因子法、Promax回転)、最終的に負荷量が.45以上の8項目、3因子を選択した。(表4)

第1因子は他者のペースへの配慮に関する3項目であるので「対人配慮」、第2因子は自己肯定感に関する2項目であるので「自己信頼感」、第3因子は自分の考えやペースで生活を設計していく3項目であるので「マイペース尊重」とした。各下位尺度の $\alpha$ 係数は.67, .53, .51である。

行動や対人関係の自己評価に関する因子分析で得た下位尺度得点を性差についてt検定を行った。(図3)

その結果、「対人配慮」尺度では、男子平均値2.45 (SD.66) と女子平均値2.77 (.62) 間に、0.1%水準の有意差を得た。(t(215) = 3.65, p<.001)

「自己信頼感」尺度でも、男子平均値2.71 (.72) と女子平均値2.45 (.71) 間で1%水準の有意差があった。(t(222) = 2.77, p<.01)

「マイペース尊重」尺度では、男子平均値2.58 (.65) と女子平均値2.53 (.73) 間に有意差はなかった。(t(216) = 0.57, n.s.)

「対人配慮」尺度と「自己信頼感」尺度で男女の得点に有意差があり、女子は「対人配慮」尺度で、男子は「自己信頼感」尺度で高い得点を

表4 行動・対人関係の自己評価因子分析結果(主因子法・Promax回転)

項目	I	II	III
I 因子 対人配慮 3項目 $\alpha = .67$			
言葉がなくても気持ちや考えが分かる	.749	.362	.319
相手の気持ちやペースに合わせられる	.718	.363	.144
友達に相談されることが多い	.466	.182	.246
II 因子 自己信頼感 2項目 $\alpha = .53$			
自分自身が好きである	.333	.827	.210
誰とでもすぐ友達になれる	.378	.451	.071
III 因子 マイペース尊重 3項目 $\alpha = .51$			
はっきりした人生の目標がある	.333	.269	.613
決めた手順や順番が変わると嫌になる	.037	-.035	.527
一度決めたことにはこだわる方である	.302	.256	.484
因子相関			
I			
II	.485		
III	.338	.242	

図3 行動・対人関係自己評価3尺度得点の性差

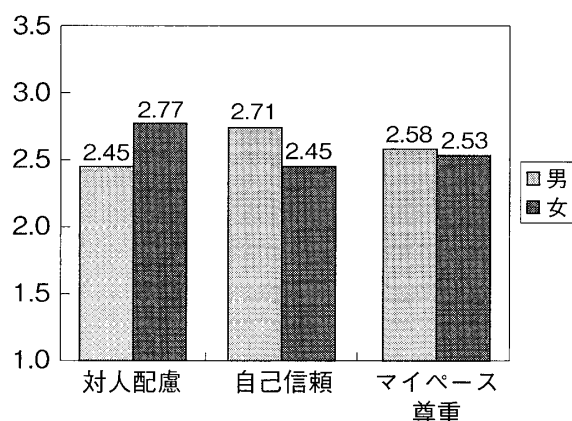


表5 幼児イメージ3尺度得点の保育実習前後の変化 (性差)

	男子					女子				
	実習前		後		t 値	実習前		後		t 値
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
「否定的イメージ」尺度得点	2.01	.77	1.60	.67	6.26 ***	1.74	.72	1.41	.59	5.47 ***
「好意的イメージ」尺度得点	2.17	.73	2.09	.71	1.07 -	2.69	.75	2.68	.78	0.26 -
「幼児能力信頼」尺度得点	2.02	.63	2.16	.75	1.79 †	2.41	.69	2.45	.72	0.55 -

\*\*\*p<.001 †p<.10 -ns

示した。「マイペース尊重」での性差はなかった。

## 結果Ⅱ 保育実習体験の効果

結果Ⅱでは、中学校で実施されている保育実習の効果を検証するために、幼児イメージの3下位尺度について保育実習前と後で比較した。さらに、保育実習前と後で幼児への否定的イメージを比較し、関連する要因の違いについて検討した。

### (1) 保育実習の内容と実習前後の幼児イメージの変化に関する性差

現在学校教育で実施されている保育実習体験は年に1回程度、数時間に過ぎない。本調査対象の中学生も、保育所(95%)において、1日(98%)、3時間未満(97%)であり、今回が初めての体験者が84%、2回目が12%である。保育実習に関する性差は、保育体験回数(男子1.03回(SD.16)、女子1.34回(.60))のみで有

意差があり、女子の体験回数が多かった。 $(\chi^2(3) = 30.05, p < .001)$

本調査では、保育実習体験の前後で同一の幼児イメージについての項目を尋ねている。3時間前後の保育体験実習でも、中学生の幼児への関心や幼児イメージを変化させる効果が期待されるのであろうか。保育体験実習が幼児イメージの変化にどのような関連があるかを知るために、実習前後の幼児イメージ尺度得点について、対応のあるt検定によってその変化を検討した。(表5)

その結果、男女とも保育実習前と後での「肯定的イメージ」に変化はないが、「否定的イメージ」尺度得点で男女ともに0.1%水準で有意差があり、男子では女子にはみられなかった「幼児能力信頼」因子に有意傾向差が見られた。つまり、短い保育体験実習でさえも、中学生男女の幼児へのマイナスイメージを減少させ、とくに男子では幼児の能力への信頼感を高める効果があったといえよう。

## (2) 保育実習前後の「否定的イメージ」の変化に関連する要因の性差

13年間の生育過程において、彼らの幼児イメージはどのような要因と関連して形成されてきたのであろうか。また、学校で実施可能な短い保育実習体験の後に生じた中学生の幼児への否定的イメージの変化は、どのような要因と関連しているのであろうか。保育実習前と後での「否定的イメージ」尺度得点への関連要因を性差について検討してみた。

幼児への否定的イメージに関連する要因を知るために、きょうだい数・幼児期満足度合成得点・母親中心育児観得点・接触体験の3下位尺度得点・幼児イメージの2下位尺度得点（保育体験実習前後）・行動・対人関係の自己評価についての3下位尺度得点・保育実習時間と保育実習回数を独立変数とし、保育体験実習前後の「否定的イメージ」尺度得点を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。（なお、「母親中心育児観」得点として、実習体験前後に同一項目への回答を求めた「3歳までは母親が育児に専念することが望ましい」「やはり育児は女のほうがむいていると思う」の2項目についての4段階評定の得点平均値を使用した。）

使用したすべての要因間の相関係数を算出し

た。（表6）その結果、接触体験の3下位尺度間には強い相関がみられたため、3下位尺度の合計得点を「接触体験3尺度合計得点」として分析に使用した。

### i) 保育実習前の「否定的イメージ」に関連する要因

実習体験前の否定的イメージへの関連要因を検討するために、きょうだい数・幼児期満足度得点・母親中心育児観合成得点（実習前）・接触体験3尺度合計得点・幼児イメージの2下位尺度得点（実習前）・行動・対人関係の自己評価についての3下位尺度得点を独立変数とし、実習前の「否定的イメージ」尺度得点を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。（表7）

男女ともに、「好意的イメージ」尺度が「否定的イメージ」尺度に対して有意な負の関連（男子 $\beta = -.346$ , 女子 $\beta = -.619$ ）を、「マイペース尊重」尺度が有意な正の関連（男子 $\beta = .286$ , 女子 $\beta = .240$ ）を示した。女子のみで「接触体験」尺度得点が正の関連の傾向差（ $\beta = .206$ ）を示した。

保育実習前の否定的イメージに関連する要因には大きな男女差はみられなかった。男女ともに幼児への好意的イメージをもっていることが

表6 使用変数間の相関係数（Pearsonの相関係数）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
①否定的イメージ尺度		-.22*	-.10	.28	-.02	-.08	-.08	-.26**	-.22	-.18	-.10	.11	-.08	-.02
②きょうだい数	.06		.00	.00	.21*	.23*	.16	.15	-.08	.19*	-.10	-.08	-.05	.05
③幼児体験合成得点	-.33**	-.14		.18*	.09	.39**	.20*	.29**	.23*	.21*	.29**	.13	.11	.14
④母親中心育児観	.02	-.06	.11		-.12	-.02	-.18	-.01	.12	-.06	-.02	.15	.10	.08
⑤世話体験尺度	-.03	.11	.13	.26**		.55**	.62**	.20*	.00	.19*	.23*	.13	.08	.03
⑥ふれあい体験尺度	.01	.06	.21*	.20*	.75**		.66**	.16	-.09	.36**	.33**	.02	.05	.00
⑦観察体験尺度	.09	.20*	.02	.27**	.67**	.68**		.17	-.10	.31**	.38**	.04	-.04	-.06
⑧好意的イメージ尺度	-.36**	-.08	.22*	.33**	.53**	.34**	.34**		.59**	.33**	.27**	.14	.10	.08
⑨幼児能力信頼尺度	-.22*	-.03	.12	.31**	.28**	.18	.11	.52**		.16	.10	.05	.12	.09
⑩対人配慮尺度	.04	.00	-.09	.17	.21*	.22*	.23*	.27**	.23*		.39**	.27**	.00	-.08
⑪自己信頼感尺度	-.24*	.01	.20*	-.07	.27**	.37**	.21*	.30**	.20*	.40**		.14	-.02	-.09
⑫マイペース尊重尺度	-.02	.07	-.04	.19	.29**	.17	.23*	.39**	.33**	.33**	.20*		.09	.05
⑬保育実習体験時間	-.06	.15	.02	.05	.03	.13	.15	.05	.05	.06	.06	-.03		-.03
⑭保育実習体験回数	-.08	.12	-.01	.19*	.19*	.17	.18	.18	.17	-.03	.03	-.03	.18	

この相関表は保育実習体験後（右側上段が男子 左側下段が女子）（\*\* 1%水準 \* 5%水準）

表7 「否定的イメージ」に関する  
重回帰分析結果（実習体験前）

	男子	女子
	$\beta$	$\beta$
きょうだい数	-.039	-.020
幼児体験合成得点	-.047	-.122
母親中心育児観得点	.147	.102
接触体験3尺度合計得点	.042	.206 †
好意的イメージ尺度得点	-.346 **	-.619 ***
幼児能力信頼尺度得点	.054	-.067
対人配慮尺度得点	-.020	-.014
自己信頼感尺度得点	-.176	-.088
マイペース尊重尺度得点	.286 **	.240 *
$\beta$ = 標準偏回帰係数	F = 3.346	F = 4.317
	R <sup>2</sup> = .247**	R <sup>2</sup> = .311***

\*\*\*p&lt;.001    \*\*p&lt;.01    \*p&lt;.05    † p&lt;.10

否定的イメージを減少させ、自分のペースでの生活を尊重する態度が幼児への否定的イメージを増加させる関係にあった。女子のみで、接触体験が多いことが、否定的イメージを増加させる傾向差がみられた。マイペース尊重の現代生活で生きる中学生の男女にとって、幼児の言動は自分の行動やペースを乱し、自分の思い道理にいかないと思わせる結果となり、接触体験が多い女子で幼児への否定的イメージが増加する傾向が示唆された。

## ii) 保育実習後の「否定的イメージ」に関連する要因

保育実習前の否定的イメージへの関連要因には大きな男女差はみられなかったが、保育実習後には性差が生じるのであろうか。

保育実習後の否定的イメージの関連要因を知るために、きょうだい数・幼児期満足度合成得点・母親中心育児観得点（実習後）・接触体験3尺度合計得点・幼児イメージの2下位尺度得点（実習後）・行動・対人関係の自己評価についての3下位尺度得点・保育実習体験時間と回数を独立変数とし、実習後の「否定的イメージ」尺

表8 「否定的イメージ」に関する  
重回帰分析結果（実習体験後）

	男子	女子
	$\beta$	$\beta$
きょうだい数	-.282 **	-.018
幼児体験合成得点	-.062	-.160
母親中心育児観得点	.306 **	.050
接触体験3尺度合計得点	.103	.231 *
好意的イメージ尺度得点	-.010	-.425 **
幼児能力信頼尺度得点	-.238 †	-.051
対人配慮尺度得点	-.110	.138
自己信頼感尺度得点	-.069	-.216 †
マイペース尊重尺度得点	.034	.067
保育実習体験時間	-.155	-.049
保育実習体験回数	-.016	-.049
$\beta$ = 標準偏回帰係数	F = 2.683	F = 2.596
	R <sup>2</sup> = .255**	R <sup>2</sup> = .258**

\*\*p&lt;.01    \*p&lt;.05    † p&lt;.10

度得点を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。（表8）

保育実習後の男子の「否定的イメージ」尺度に対しては、きょうだい数が有意な負の関連（ $\beta = -.282$ ）を、「幼児能力信頼」尺度が負の有意傾向差（ $\beta = -.238$ ）を示し、実習後の母親中心育児観得点が有意な正の関連（ $\beta = .306$ ）を示した。つまり、男子では、きょうだが多いこと、幼児の能力への信頼が高いことが否定的イメージを減少させ、育児は母親中心であるべきと考えることが幼児への否定的イメージを高める関連があった。

女子の「否定的イメージ」尺度に対しては、「好意的イメージ」尺度が有意な負の関連（ $\beta = -.425$ ）を、「自己信頼感」尺度が負の関連傾向差（ $\beta = -.216$ ）を、「接触体験合計得点」が正の関連（ $\beta = .231$ ）を示した。つまり、幼児に好意的イメージを持つこと、自己自身への肯定感や信頼感が高い女子で否定的イメージが低くなること、女子では接触体験が多いことが幼児の否定的イメージの増加に関連することが示された。

保育実習後には、男子では幼児能力への信頼が、女子では好意的イメージが高まることで否



定的イメージを減少させる結果になる一方、男子ではきょうだい関係や育児期の母親責任を強調する母親中心育児観の強さが、女子では乳幼児との接触体験の多さが、否定的イメージに関連する要因になったことが注目される。

### 考察および結論

本田（2007）は「かつて来日外国人を驚かせた日本人の子どもに対する優しさ、それがいま、子育てがリスクと考えられるようになった」とし、現代の少子化社会は子どもが忌避される時代であるという。きょうだい数や乳幼児期の母親中心育児の減少が予想されるこれからの少子化社会に向かって、「子育ては大変だけれども豊かな体験になる」ことを実感できる経験の提供によって、乳幼児への忌避感を減少させ豊かな親準備性を育成すること、子育てを楽しむ次世代を育成することはたやすいことではない。

中学生の女子では接触体験の多さが幼児への好意的反応ばかりでなく、忌避感をも高める要因になっていることは母親準備性にとっても無視できない事実である。これからの子育てが男女共同作業になるためには、将来の父親たちの育児参加促進が必要であり、男子中学生の父親準備性に関連が大きいと思われる幼児への否定的イメージ形成の関連要因について検討する必要がある。

本稿では、中学2年生が経験してきた乳幼児との接触体験や自己の行動・対人関係と幼児への否定的イメージとの関連、学校での保育実習体験が幼児イメージの変化に与える影響について性差の観点から検討してみた。その結果から次世代育成への示唆をまとめて締めくくりとしたい。

#### 1 接触体験・幼児イメージが次世代育成に与える影響についての性差

中学生が生育過程で経験してきた乳幼児との接触体験の内容や幼児に対するイメージに関する性差は、極めて大きい。

しかし、本調査での3時間前後の短時間の保育実習体験でも、男女ともに幼児への否定的イ

メージが低下し、男子の幼児能力信頼感が向上する傾向がみられた。とくに、幼児との関わり体験機会が少ない男子で幼児イメージの向上が認められることは意義深いといえよう。きょうだいが多いことが男子の否定的イメージの低下に関連していたように、保育実習などさまざまな幼児と接する体験の増加は将来の父親準備性を高めること、それが男子の育児参加を促進することにつながっていくと予想される。

学校教育内での保育実習体験時間は限られているが、その短い体験の中でとりわけ男子生徒が幼児への感受性や養育性を発達させ、幼児への関心を高め、その理解につながる結果になるのであるならば、学校以外の地域社会活動やボランティア活動の中で、次世代の父親予備軍に親準備性を獲得させる機会を充実させることが求められる。

#### 2 生活スタイルが次次世代育成に与える影響についての性差

保育実習体験前には「マイペース尊重」は、「否定的イメージ」を低下させる関連があった。

ところが、保育実習体験後にはその関連は見られなかった。保育実習体験後の男子では、自分のペースにこだわるだけでは幼児との交流はできないことを経験した結果、男子での幼児への否定的イメージの低下や幼児能力信頼の増加傾向が見られたことは重要である。また、実習体験後の女子では、自己を肯定できることすなわち「自己信頼感」をもつことが否定的イメージの低下に関連する要因になっていることも注目されよう。

保育実習後に、男女ともに自分自身へのこだわりから幼児へと関心の視点が移っていったことによって忌避的な幼児イメージが減少したことは次世代育成力観点からは望ましいことである。

育児期にある若い親たちの多くの調査が、「子育ては楽しいことも多いが自分の時間がとれないことが辛い」という本音を語っている。現代社会生活に根づいているマイペース尊重の生活態度からも、次世代支援策の発想転換を求められているといえよう。マイペースの生活が

保障されることが中学生の幼児への否定的イメージを抑制することからも、育てる側に余裕をもたせる支援が子どもへの忌避感を減らし、子どもの最善の利益につながっていくという発想に基づいた親支援策が欠かせないといえよう。

### 3 性別役割観が次世代育成に与える影響についての性差

男子は、生育歴の影響を知る指標のひとつである自分の幼児期への満足度や親への近親感が女子よりも低い。また、将来子どもがほしいかを尋ねた子どもも願望でも「分からない」が40%を占めるなど子どもへの関心は概して薄いといえよう。また、子育てでの母親役割を強調する母親中心育児観、きょうだいの多さが幼児への否定的イメージに関連していたことから、男子は保育に参加することが直接的に自己自身の幼児イメージの変化につながるわけではなく、家庭における母親やきょうだいとの関係のあり方の影響力が大きいと思われる。女子では、幼児への好意的イメージの増加や接触体験の多さが否定的イメージに関連していたように、日常生活や保育実習における自己自身の体験自体が幼児イメージの変化に関連していると考えられる。

調査対象の中学生が就学したころの母親の就労率は35%、核家族が63%であることから、「3歳までは母の手で育てるのが望ましい」という三歳児神話の考え方の影響力はなお大きいといえよう。幼い時期の性別役割観や母親中心育児の肯定感は次世代においても急激な変化はみられず、とくに男子では幼児イメージや男女の親役割観に大きな影響を与えるであろう。

2000年以降、全国大学での子ども学部・学科の設置は著しく、その多くは男女共学の方向で進んでいる。従来からの女子学生本位の伝統的カリキュラムと保育実習による保育士や幼稚園教諭養成機関においては、男子の次世代育成力

養成を視野に入れた新しい発想によるプログラムや保育方法を含む保育実習のあり方が提示されなければならない時期が来ているかもしれない。その際、次世代自身の中に無意識に組み込まれているなお根強い母親中心育児観からの発想の転換など、なお多くの課題が残されているといえよう。

### 【引用文献】

- 原田正文 子育ての変貌と次世代育成支援 名古屋大学出版 (2006)
- 文部科学省生涯学習政策局 乳幼児と年長児童の交流状況調査報告書 (2006)
- 中野由美子他 次世代育成力の形成に関する研究Ⅰ—接触体験・保育実習体験が学生の幼児イメージに与える影響 目白大学人間社会学部紀要 4号 67-79 (2004)
- 中野由美子 次世代育成力の形成に関する研究Ⅱ—乳幼児との接触体験が子育てに与える影響・学生と乳幼児をもつ母親との比較から— 家庭教育研究所紀要27号 40-51 小平記念日立教育振興財団 (2005)
- 伊藤葉子 中・高校生の親準備性の発達 日本家政学会誌 Vol.54 No.10 801-812 (2003)
- 伊藤葉子 中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討 日本家政学会誌 Vol.58 No.6 315-326 (2007)
- 岡野雅子 青年期の女子の子どもに対するイメージ 日本家庭科教育学会誌 第46巻-1号 (2003)
- 室 雅子 中学・高校での乳幼児接触体験と保育教育の果たす役割 家庭教育研究所紀要21 75-85 (1999)
- 倉持清美, 無藤隆 保育学習における中学校家庭科教員研修の効果 日本家政学会誌 Vol.54 No.4 317-326 (2003)
- 本田和子 子どもが忌避される時代 新曜社 (2007)